

## 『本朝二十不孝』私見

### 一

花の吉野に曝葛屋彦六、雑書の文言通り、家榮えて、五人の娘、美形いずれ劣らず、仕合せは確約されているかに見えた。

長女お春。

その里のよろしき方へもらはれ、縁組の間もなく、懐胎の身となれば、日を数へ、月を繰り、産まれぬ先、乳姥を定め、鶴亀のつきし小袖を拵へ、夜更けて、松吹く風の戸に音信るるをも、その事かと、母の親目も

佐竹昭広

合はず氣遣ひせしに、悲しや、腹痛みて、身を悩み、五七日も憂目を見せし。常々、子安の地藏に祈り、腹帯の明神に宿願かけしかひもなく、惜しや命、十六の卯月一日の明けがたに、無常鳥の鳴き出し、親兄弟にふかく嘆かせ、……

次女お夏。

程なく十六になりて、しかも風俗姉に見まざりて、かれこれこがるる中に、この所の庄屋を捌き、簀にしてもくるしからぬ方へ契約して、諸道具拵へしが、「当年は十六、姉が事思へば吉凶あしき」とて、その年を延べて、十七の正月に祝言とり急ぎけるに、これも懐

妊して、月をかさね、姉がごとく、持籠りにして果てける。……

三女お秋、十五歳。何の因果でと悲嘆にくれる葛屋夫婦は、すすめられて、お秋に然るべき聶を迎え、隠居して法体となり、ようやく心安かに寺参りの楽しみ。

明くれば、入り聶孝をつくし、遠き海魚をかかる山家に調べ、せはしき事は余所の吹く風に聞きなし、雪にも焼火して、冬なき国の守をも恐れず、この上に願ひもなかりしに、いつの頃よりか、お秋、青梅をすけるにぞ、度々懲りて、うたてく、諸神に祈誓をかけ、

「平産は身の養生、これを大事」と、ことになれたる祖母を雇ひ、腹帯のしめ加減、庭ばたらきに身をこなし、腰をすこしもひやさず、目通りより高く手をあげさせず、寝姿も足を伸ばさず、かしらは関枕にてとどめ、身をかたむるに残る所なく、食物をもあらため、産月を待ちけるに、これも五体をもだえ、十日ばかりもうき事にあひて、眠るごとくに息絶へ、……

後を追って自害しようとした葛屋夫婦ではあったが、口々に説得されてそれも叶わず、四女お冬の縁談には、皆様の御意のままにと力無くうなづくばかり。

お冬に縁組の事、おの／＼言ひも果てぬに、声をあげて泣出し、涙片手に挾箱の蓋を明けて、麻の衣の墨染、浄土珠数を取出し、「自らが縁は仏様にむすぶ心ざしなり。このたびの愁へのなきうちから、夢幻と思ひさだめし世の中、姉さまたちの跡をもとふべしと願ひしに、この宿を出かね、又もや憂き目を見じ。乱れ心の黒髪ある故」と、手づから切るを、やう／＼にとどめ、「さもあれば、親の不孝の第一なり」と、親類あつまり、殊には、下市の里に住まれし姨たる人を呼びよせ、さま／＼に云ひなだめ、「せめては、三日なりとも男といふものにあひ馴れ、その後は、出家になりとも心まかせ」と、涙にくれて、魂の入りかはるまで教訓して、おし付け合点させ、祝儀の事済みて、いつとなく、契りふかく、四年あまりも過ぎ行けば、子細なく、よろこびしに、又、月とまりて、産月にたらず、これも空しくなりぬ。……

いかなる前世の悪縁ゆえかと、両親はいよいよ世を厭い、仏道に専念して娘四人の後世を弔い、屋敷の片隅に引き籠ってしまった。母屋は荒れ放題、野良犬のすみかとなる。

残るは五女の乙女、十五歳。両親は今度こそ切に出家をすすめたが、乙女の量見はさにあらず、

「たま／＼人間に生を受けて、男といふもの持たては口惜しかりき。親達の厄介にはならじ」と、忍びて庵を立退き、行方知らずなりぬ。これをも親子の中なれば、ふかく嘆かれしに、音信不通になりて、おのれと夫を定めける。しかもこの男、山だちをして渡世とす。ある夜、風あらく雨降りて、人音まれなる時を見合はせ、乙女が案内をして、男をつれて、我が親のかたに立ち入り、夫婦のねられし上に畳を置きかけ、このくるしみの内に、少しの貯へ物を盗み、岨づたひに逃げ行きしに、この大悪、いづくまでか遁るべし。踏み馴れし道筋の岩も、人影と見えて、心のやるせなく、知れたる淵に飛び入り、男も女も、眼前に恥をさらして、葛屋の名をくだしぬ。(巻三ノ一、娘盛りの散り桜)

「娘盛り」とは、十三四歳から十七八歳までをいう。その年頃の愛娘が五人のうち四人まで、次々と判で押したように難産のため死んでゆく状景はすさまじい。次女、三女、四女と階を追って両親の悲嘆と恐怖と不安をつのらせ

てゆく筆の運びも冴えている。親に逆らわず、縁づいては死んで行った四人の姉の後を受けて、最後に末娘乙女の登場。本章の副題に「吉野に恥をさらせし葛屋」とある張本人である。かの女の親不孝と天罰を描かなければ、『本朝二十不孝』の説話とはならない。

## 二

西鶴の『本朝二十不孝』は、貞享元年以来、二年、三年と好調に版を重ねつつあった藤井懶斎『本朝孝子伝』巻下「今世」の部の孝子二十人を、ことごとく希代の親不孝者に改造して見せた智略縦横の転合書である。

「娘盛りの散り桜」の場合は、肥後の国大矢野の孝子、喜左衛門が反転の素材に選ばれた。

肥後国天草郡大矢野党者島原城主源尚舎忠房之所<sub>ニ</sub>兼<sub>テ</sub>治<sub>ムル</sub>一也。党<sub>ニ</sub>有<sub>リ</sub>三<sub>ニ</sub>今泉村一。農夫喜左衛門<sub>ト</sub>イフ者郡中呼<sub>テ</sub>称<sub>ス</sub>ニ孝子ト。其父市右衛門初<sub>メ</sub>居<sub>ス</sub>ニ雷邑<sub>ニ</sub>。後<sub>ニ</sub>移<sub>ス</sub>ニ家<sub>ヲ</sub>干大山口<sub>ニ</sub>。市右衛門老<sub>シテ</sub>而<sub>テ</sub>不<sub>レ</sub>堪<sub>ヘ</sub>ニ耕稼之<sub>ノ</sub>勞<sub>ニ</sub>。分<sub>テ</sub>与<sub>フ</sub>田畝<sub>ヲ</sub>千三子<sub>ニ</sub>。長子十左衛門先没<sub>ス</sub>。次<sub>ノ</sub>子金左衛門窮困<sub>シテ</sub>不<sub>レ</sub>修<sub>メ</sub>ニ農業<sub>ヲ</sub>。三子喜左衛門治<sub>メ</sub>ニ三石之田<sub>ヲ</sub>。

養フニ父母ヲ於家ニ。素<sup>モリ</sup>貧シテ衣食皆乏シ。然<sup>レ</sup>モ事ヘテニ父母ニ一有<sup>リ</sup>ニ孝志<sup>ニ</sup>。未<sup>ダ</sup>嘗<sup>テ</sup>使<sup>ミ</sup>之<sup>ヲ</sup>至<sup>ラ</sup>ニ飢寒<sup>ニ</sup>。近歲凶荒相屬衆民餓孚<sup>トナンス</sup>。喜左衛門躬<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>食<sup>セ</sup>唯奉<sup>ジ</sup>ニ父母ニ使<sup>ミ</sup>之<sup>ヲ</sup>能<sup>ク</sup>食<sup>セ</sup>。辛酉<sup>ニ</sup>大<sup>ニ</sup>饑<sup>ス</sup>。喜左衛門論<sup>シテ</sup>ニ父母ニ移<sup>シ</sup>ニ居<sup>ラ</sup>長尾山ニ採<sup>テ</sup>薪<sup>ヲ</sup>売<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>使<sup>ミ</sup>其<sup>ヲ</sup>妻<sup>ヲ</sup>掘<sup>ラ</sup>ニ蕨<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>給<sup>メ</sup>ニ父母<sup>ニ</sup>。其<sup>ノ</sup>妻<sup>共</sup>不<sup>レ</sup>食<sup>セ</sup>之<sup>ヲ</sup>。使<sup>ニ</sup>父母<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>食<sup>ヲ</sup>足<sup>ラ</sup>供<sup>フ</sup>之<sup>ヲ</sup>。妻<sup>亦</sup>且<sup>夕</sup>有<sup>リ</sup>ニ婦行<sup>ニ</sup>。郡中又稱<sup>ス</sup>之<sup>ヲ</sup>。夫妻<sup>共</sup>盡<sup>シテ</sup>力<sup>ヲ</sup>營<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>養<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>足<sup>ラ</sup>。故<sup>ニ</sup>老母<sup>愁</sup>之<sup>ヲ</sup>自到<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>婿<sup>ムコ</sup>阿村<sup>ノ</sup>農夫大郎左衛門之家<sup>ニ</sup>就<sup>テ</sup>食<sup>フ</sup>。是年<sup>ニ</sup>老父<sup>市</sup>右衛門臥<sup>ス</sup>病<sup>ニ</sup>。欲<sup>ス</sup>食<sup>セント</sup>ニ鮮魚<sup>ヲ</sup>。喜左衛門家<sup>乏</sup>山深<sup>ニ</sup>難<sup>シ</sup>得<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>。其<sup>ノ</sup>妻<sup>下</sup>ルコト山<sup>ヲ</sup>數里行<sup>テ</sup>釣<sup>ル</sup>ニ海濱<sup>ニ</sup>。偶得<sup>ニ</sup>黑鯛<sup>ヲ</sup>。欣欣<sup>ト</sup>携<sup>テ</sup>婦<sup>ヲ</sup>供<sup>メ</sup>之<sup>ヲ</sup>。老父<sup>大</sup>ニ悦<sup>ブ</sup>。經<sup>テ</sup>日<sup>ヲ</sup>病<sup>篤</sup>シ。喜左衛門与<sup>テ</sup>妻<sup>共</sup>悲<sup>シ</sup>之<sup>ヲ</sup>。負<sup>テ</sup>ニ老父<sup>ヲ</sup>婦<sup>リ</sup>ニ於<sup>ニ</sup>大山口<sup>ニ</sup>。日夜<sup>ヲ</sup>侍<sup>シ</sup>之<sup>ヲ</sup>療<sup>ヲ</sup>養<sup>ヲ</sup>盡<sup>セ</sup>之<sup>ヲ</sup>。心終<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>愈<sup>テ</sup>以<sup>テ</sup>ニ六月十一日<sup>ヲ</sup>没<sup>ス</sup>。年七十五。喜左衛門与<sup>テ</sup>妻<sup>共</sup>哭<sup>慟</sup>甚<sup>ニ</sup>。至<sup>レ</sup>癯<sup>ス</sup>ニ寢<sup>食</sup>ヲ。喪葬<sup>ヲ</sup>畢<sup>テ</sup>而<sup>シテ</sup>奉<sup>ジ</sup>ニ牌位<sup>ヲ</sup>於<sup>ニ</sup>室中<sup>ニ</sup>。日<sup>ニ</sup>供<sup>ヘ</sup>膳<sup>ヲ</sup>羞<sup>ニ</sup>菜菓<sup>ヲ</sup>。旦夕<sup>ヲ</sup>拜<sup>スルコト</sup>之<sup>ヲ</sup>如<sup>シ</sup>事<sup>ル</sup>存<sup>ニ</sup>矣<sup>ニ</sup>。(中略)老母年七十三。近歲失<sup>レ</sup>明<sup>ヲ</sup>。喜左衛門与<sup>テ</sup>妻<sup>共</sup>負<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>老母<sup>ヲ</sup>又移<sup>テ</sup>居<sup>ニ</sup>山中<sup>ニ</sup>。採<sup>テ</sup>薪<sup>ヲ</sup>給<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>掘<sup>レ</sup>蕨<sup>ヲ</sup>供<sup>メ</sup>之<sup>ヲ</sup>。……

## 贊

貧家養<sup>テ</sup>レ父物<sup>ハ</sup>龜<sup>ハ</sup>精<sup>ハ</sup>精<sup>ハ</sup>。山<sup>コホ</sup>葛<sup>言</sup>采<sup>リ</sup>江魚<sup>是</sup>烹<sup>ル</sup>。侍<sup>シテ</sup>疾<sup>ニ</sup>致<sup>シ</sup>力<sup>ヲ</sup>哭<sup>シテ</sup>死<sup>ヲ</sup>絶<sup>レ</sup>食<sup>ヲ</sup>。母<sup>之</sup>無<sup>レ</sup>目<sup>事</sup>ル<sup>モ</sup>此<sup>ニ</sup>亦<sup>至</sup>レリ。

(十五、大矢野孝子)

「贊」にも記されているように、孝子喜左衛門とその妻は、山中に葛を掘って親を養った。俳諧師ならば、「葛」と聞けば間髪を入れず「吉野」を付合に出す『俳諧類船集』。「葛」から「吉野葛」、「吉野」の「葛屋」と、肥後の貧農も西鶴の手にかかれれば、たちまち、所・職業をすり代えられて跡形もない。

「娘盛りの散り桜」の章が、素材を「大矢野孝子」に仰いでいることについては、他にも傍証として、三女お秋の筆が「孝をつくし、遠き海魚をかかる山家に調へ」とある箇所と、後者の「下<sup>ルコト</sup>山<sup>ヲ</sup>數里行<sup>テ</sup>釣<sup>ル</sup>ニ海濱<sup>ニ</sup>。偶得<sup>ニ</sup>黑鯛<sup>ヲ</sup>。欣欣<sup>ト</sup>携<sup>テ</sup>婦<sup>ヲ</sup>供<sup>メ</sup>之<sup>ヲ</sup>」という記事の類似性を挙げるこ

とができるであらう。

吉野の葛屋の親不孝者は、男ではなく、乙女という名の娘であった。この乙女という名、及び姉妹五人という人数、これらは松田修氏の指摘された通り、吉野を発祥の地とする五節の舞の故事を踏んでいると思われる。

五節。或は上の丑の日、或は下の丑の日、を用い給ふ時も有と也。此おこりは天武天皇よしのの滝の室におはしまし給ふ時に、日の暮がた琴を弾じて御心をすませたまへるに、むかひの山の峯よりあやしき雲立ちのぼりけるを、つく／＼御覧あれば、雲中に天女のすがたあらはれて御琴のしらべにあはせ、あまの羽衣の袖を五たびひるがへして神女のかなでけるゆへに、五節とはいへり。されば此時の義をうつさせたまひて五節の舞姫といふ事は侍るなり、舞姫五人なり。主上この日は御指貫をめしたまへるよし、此時の外に天子の御さしぬきめさせたまふ御事はなしとやらん。又大管会るときにも五節はありとなん。かの神女あまくだりしをみたまひし時、帝の御歌に

乙女ごもとめさびすもから玉を袂にまきてをとめさびすも

又古今集に五節のまひ姫をみて、僧正遍昭、

天津風雲のかよひ路吹きとぢよをとめのすがたしばしとどめん（中川喜雲『案内者』巻六、十一月中の丑の日）  
五節の舞姫、天津乙女の名にあやかる末娘を夜半に墜死させたことも、「眼前に恥をさらして、葛屋の名をくだし

ぬ」という縁語仕立ての軽口と同様、西鶴の転合だったかもしれない。謡曲『吉野天人』のキリは、「げにも上なき君の恵み、治まる国の天つ風、雲の通ひ路吹き閉づるや、少女の姿、留まる春の、霞もたなびく三吉野の、吉野の山桜うつるふと見えしが、又咲く花の、雲に乗り、又咲く花の雲に乗りて、行方も知らずぞなりにける」と神韻缥缈であつたが、葛屋の不孝娘は、何ともぶざまな最期をとげて、あたら乙女の「名を（も）くだしぬ」という趣向だったか。

### 三

五節の舞姫に擬した五人娘の上四人の名が春夏秋冬の四季に配されていることは注目を要する。「娘盛りの散り桜」には、「二十四孝」の黄香が巧みに摂取されていることが、この四人の名を介して察知されると思う。

それ漢の武帝は、五常正しくましまして、父母に孝行をなし給ふ。関子雋は孝ゆゑ弟を憐むなり。老萊子は、老たる親を慰むる。大舜は孝ゆゑ、大象小鳥の情を得る。丁蘭は幼くして母におくれ、母の形を木像に

作り随ふなり。曾參が薪、王裒は親の墓所にて悲しむ孝行。姜詩江河の水を汲む事。楊香は命を虎にまかす。董永天津織姫と契りし事。郭巨金釜を掘り出す。

王祥が氷の内の新魚。朱寿昌は幼くして母に別れ、孝ゆゑ母にめぐりあふ。劊子は父母の両眼ゆゑ、鹿に身をそめ孝をなす。蔡順は、天下大きに乱れ又飢饉して、食事乏しかりしかば、桑の実を拾ひ母を養ひし孝の人なり。瘦黔は、父の煩ひに身を碎く。吳猛衣をぬぎ親の蚊帳を張りたり。張孝張礼、是又孝あるなり。田真兄弟三人は孝ゆゑ樹木を愛したり。山谷が孝行。陸績が橘。孟宗が笋。黄香は四季を分けて孝行せり。唐夫人が乳味。いづれを分けん方もなし。(謡曲「箱崎物狂」)

「四季を分けて」行われた黄香の孝とはいかなる孝であつたか。

冬月温衾暖 夏天扇枕涼

兒童知子職 千古一黄香

黄香は安陵といふ所の人なり。九歳のとき、母にをくれ、父によくつかへて、力をつくせり。されば夏のきはめてあつきおりには、まくらや床をあふいで、すゞ

しめて、又冬のいたつてさむきときには、ふすまのつめたきことをかなしむで、わが身をもつてあたゝめて、あたへけり。かやうに、孝行なりとて、太守劉謹といひし人、札をたてゝ、かれが孝行をほめたるほどに、それよりして、人みな黄香こそ、孝行第一の人なりとしりたるとなり。(明暦二年刊「新板二十四孝」)

『二十四章孝行録抄』(寛文五年刊)には、「此詩言ハ、香が親ニ能ク孝ヲツクシ、冬月ノ寒キニハ父ノ衾ヲ温メテ父ヲ暖ナラシメ、夏日ノ熱ニハ、枕ヲ扇デ涼シ、四時ニシタガツテ親ノ行往ヤスカラン事ヲセリ」とある。お春、お夏、お秋、お冬の四人は、右の黄香の四季から着想された。末娘の乙女が、「夫妻のねられし上に畳を置きかけ、此くるしみの内に、少しの貯へ物を盗」んだという部分も、黄香の衾の逆設定と解される。『本朝二十不孝』のおもしろさは、西鶴が『本朝孝子伝』「今世」の二十人をおかにして不孝者に転じ、「二十四孝」の孝子譚をどのように活用したかという二点に絞られる。『本朝二十不孝』という書名自体が、すでに『本朝孝子伝』と「二十四孝」のもじりであった。

「娘盛りの散り桜」を、森銚三氏は次のように批判され

た。

『二十不孝』の二十章の内では、「娘盛りの散り桜」(巻三ノ一)を以て旺卷とする。五人娘の上四人までが、嫁いでは産のために死んで行く。その同じことを繰返して叙述するのに、疎密よろしきを得ていて、手際がいい。そして末娘は尼となつて、姉達の菩提を弔えと親が勧めるのを耳にも藉さず、家出をして行方不明になつてしまふ。この話が以上で打切られていたならば、好箇の短篇小説として推称に値しように、右の末娘が山賊の妻となつて、夫を手引して実家に忍び入り、帰りに道を踏外して淵に落ちて、夫婦が同時に死んでしまふということにして結末を附けたのが拙劣で、折角の前半をぶつ壊してしまつてゐる。この結末さえなかったらと残念で堪らない。

〔井原西鶴〕

こゝに二十不孝の中から「娘盛りの散り桜」(三ノ二)の一章を取上げて、更に私の論旨を徹底せしめよう。その「娘盛りの」の一話では、五人娘の内の四人が、つぎつぎと嫁いでは、産の悩みで死んでしまふ。一人だけ残つた末娘が年頃となつたのに対して、両親は尼となつて姉達の菩提を弔ふやうにと勧める。娘はその

言葉に耳を藉さうともせず、勝手に男を拵へて、家を出たまゝ行方知れずになつてしまふ。もし「娘盛りの」の一章が、これだけで打切られてゐたとしたら、感動の深い好箇の短篇をなすところだつたのに、没分曉なる作者は、それだけでは教訓文学たり得ないとしたのであらう。更にその末娘に天罰の一条を付け加へて、折角の話をぶちこはしてしまつた。すなはち娘は、男を導いて、自分の生家に窃盗に入り、物を奪つて逃げようとして、崖から谷間に墜ちて死んでしまふことにしてゐるのである。それに依つて教訓文学としての形は成したかも知れないが、作品としては何の余情もない凡話に終らせてしまつたのであり、前半がよいだけに、それだけ不自然な結果を強ひて附けた一事が惜しまれる。

〔西鶴一家言〕

森氏は、葛屋「夫妻のねられし上に畳を置きかけた」乙女らの行為に全く言及されない。しかし、黄香の衾を重い畳に変えて親不孝の道具としたところこそ、結末部の眼目なのである。氏は『本朝二十不孝』を西鶴作にあらずと主張されることに急で、『本朝二十不孝』の制作原理(『文学』昭和五十七年四月号拙稿)を把握して居られない。

#### 四

同じ筆法で、森氏はさらに卷五ノ一「胸こそ踊れ此の盆前」をも論難される。

「胸こそ踊れ此の盆前」(五ノ二)の一章を例に引かうなら、これもまた単純な話で、老母に誠を以て仕へる嫁女と、老母は自分の生みの親でありながら、邪慳に當る娘とを対立的に描いて居り、最後に嫁女の亭主即ち老母の生んだ長子が旅から帰つて来て、妹を家から追出して、一家を円満ならしめたといふので話は終つてゐる。この話も作者の書き方が粗雑で、娘と本気で争つたりする老母が、痴呆性なのだらうかと思はれるやうな扱ひ方がしてあるのだから、問題にならないが、もしこの老母が人並みの女だつたとしたら、たとへ不孝者にもせよ、追ひ出された娘の上を案じて、心は安まらなかつた筈であらうし、老いたる母にさうした思をさせることに於て、長子の執つた処置も、當を得たものとはいひ難い。作者は老母と同時に、その長子をも描き得てゐない。二十不孝の作者は、生きた人

間を描かうとしてゐないし、また描くだけの伎倆を持つてゐなかつた。それで二十不孝の二十話は、その一つ一つがたよりなくて真実味を欠いてゐるのである。

(『西鶴一家言』)

盆の節季、宵の口からどつと押しかけた借金取り応対に四苦八苦する母親の歎きもよそに、娘の小さんは「うれしさに胸の踊るはならし哉」(『伊勢正直集』)とばかり、庭において盆踊のならし。腹すえかねて叱責する母親に雪踏を投げつける小さん。思わず手もとの爪切を持って立ち上る母親。それを必死に制止する兄嫁。義妹のためにさまざま詫びをすませた兄嫁は、売り尽してすでに乏しい身の回りの小物を持って家を出、盆の供え物を調達して戻り、姑を狂喜させる。

母の歎きをかまはず、娘は庭において、身振ひに色科やりて、明日の晩よりの踊のならし。「いかに若きとて、さりとては心なし。人の手前、世の思はく、身の程も恥ぢぬべし。わが年は十八、姫十六なれど、世間の思ひやり有て、あのごとく身を捨て内証を隠し、親里へも是をしらせず、かゝる前後を凌(しの)がるゝは、女の鑑(かたみ)にも、末々までしらすべき最愛(いとよし)き人なり。いまだ、



この春縁組して、半年も立つやたゝぬに、衣類、敷銀、手道具までをなくして、娼なればとて面目なし。

我とあの人がやうに、心ざしもかはる物か」と云ひもはてぬに、娘ははきたる雪踏を親になげ付け、不断の寢間に行くを、母も今は堪忍ならず、手元にあらし爪切持て立たれしを、娼、懷とめて、漸々に是を詫言すまして、片陰に立ち忍び、うつくしき髪押への、さし櫛、簪を抜き出し、玉子色の帯を、ほそき組帯に仕かへて、この三色、持て出しが、しばらく有て帰り、右の袂より、銀百四五十取出し、左の手に、塩餅五つ、素麵二把、懷より白き餅を出し、姑にあたへければ、四五度も、いただき、涙を流し、「この恩いつ報すべき。嬉しや、そなたの御心ざし」と、丸団にて、娼を扇ぎたて／＼、よろこばれし。

ただ一人最後まで居残つて一部始終を見ていた情強の借金取りが、「不孝なる娘も有に、この娼子の心入れ、さりとては肝に銘じて、何と讀むべき言葉もなし」と感動し、「錢二貫三百、細金五十目ばかり、有にまかせ、この娼に進ずる」と言い捨て、立ち去る。

この辺の趣向は、「二十四孝」の張孝張礼にもとづいて

いるのだらう。

偶値二緑林児一 代烹云三瘦肥一

人皆有兄弟 張氏古今稀

張孝張礼は兄弟也。世間飢饉の時に、八十余りの母を養へり。菓をひろひに行たれば、一人のたへつかれたる者来りて、張礼を殺してくらはんといへり。張礼云ふ様は、我老たる母をもてり。今日はまだ食事をまいらず候程に、暇を給はれ。母に食をまいらせてやがて来らん。もしこの約束たがへば、家に来て一族迄殺し給へと云て、約束のごとく彼者の所へ行きにける。兄の張孝是を聞て、又後より行き、盗人にいへるやうは、我は張礼より肥たる程に食するによかるべし。我を殺して張礼扶よといへり。又張礼は、我初より約束なりとて、死をあらそひければ、彼無道なる者も、兄弟の孝を感じて、ともに死をゆるし、かやうの兄弟古今希也とて、米二石塩一駄あたへり。是を取て帰り弥孝道をなせると也。

〔新板二十四孝〕

賊にしばしの暇を乞うて母のために食を供する張礼は、小さんの兄嫁に当り、身勝手な妹小さんは、身をもつて兄に代らうとした弟張孝の逆設定であると見なすことができ

る。

また、小さんの親不孝が盆踊にうつつを抜かす不心得として示されている点も、「二十四孝」の説話と深く関係している。

『本朝孝子伝』『今世』の部の二十人を直接の対象とする『本朝二十不孝』が、「胸こそ踊れ此の盆前」の章を筑前の国に設定した時、西鶴は必ずや『本朝孝子伝』『今世』の第十六「中原休白」を意識していたはずである。

休白、筑之前州遠賀郡中原ノ人也。不<sub>レ</sub>著<sub>ニ</sub>其姓氏<sub>一</sub>。自称<sub>ニ</sub>中原某<sub>一</sub>。中原多<sub>シ</sub>不<sub>レ</sub>肆。休白亦賣<sub>リ</sub>ト<sub>ヲ</sub>兼力<sub>レ</sub>農<sub>ヲ</sub>。為<sub>リ</sub>人<sub>ト</sub>慤<sub>ニ</sub>笑<sub>ニ</sub>シテ里民皆<sub>ニ</sub>欽慕<sub>ス</sub>之<sub>一</sub>。事<sub>ヘ</sub>テ父<sub>ニ</sub>尤<sub>ニ</sub>孝<sub>ナ</sub>す。父<sub>モ</sub>亦甚<sub>ニ</sub>愛<sub>ス</sub>ニ休白<sub>ヲ</sub>。休白自<sub>リ</sub>弱<sub>至</sub>リ<sub>ニ</sub>壯<sub>ニ</sub>自<sub>リ</sub>強<sub>至</sub>テ<sub>レ</sub>艾<sub>ニ</sub>未<sub>ニ</sub>嘗<sub>一日</sub>与<sub>レ</sub>父離<sub>居</sub>。一<sub>ニ</sub>非<sub>レ</sub>有<sub>ル</sub>ニ外事<sub>一</sub>則常<sub>ニ</sub>在<sub>テ</sub>側<sub>ニ</sub>愉愉如也。其<sub>ノ</sub>情態恰<sub>モ</sub>若<sub>シ</sub>嬰孩<sub>之</sub>於<sub>ニ</sub>慈母<sub>一</sub>。……年五十歳に及んでもなお、父の前では「恰モ若シ嬰孩之於ニ慈母一」と書かれた休白の情態は、あたかも

わらべのごとく親のおもひ子  
孝行は老ていよ／＼つとむらし

（『鴉露俳諧』）  
の句境であり、「二十四孝」老萊子の様態さながらである。

戯舞<sub>子</sub>二嬌癡<sub>一</sub> 春風動<sub>ニ</sub>綵衣<sub>一</sub>

双親開<sub>レ</sub>口笑 喜色満<sub>ニ</sub>庭囲<sub>一</sub>

老萊子は二人の親につかへたる人なり。されば老萊子、七十にして、身にいくしき衣をきて、おさなきものゝかたちになり、舞たはぶれ、又おやのためにきうじをするとして、わざとけつまづきて、ころび、いとなきものゝやうになきけり。……（『新板二十四孝』）  
此詩言ハ萊子七十アマリニテ百歳ノ父母ヲモテリ。父母トモニ子ノ老ヲカナシマン事ヲオソレテ、親ノ心ヲ楽<sub>タシメ</sub>シメンタメニ、嬌癡トハ愚ナルコビヲシテ、色々ノ衣裳ヲ春風ニ飄<sub>ヒルガ</sub>シテ、舞イタワブルレバ、双親モ大ロアイテ喜ワラフ。（『二十四孝孝行録抄』）  
筑前という国、老萊子の例、「胸こそ踊れ此の盆前」の出所は、すべて『本朝孝子伝』の「中原休白」に求め得る。

孝子休白に対して、小さんという不孝娘を立て、老萊子の綵衣の舞を染浴衣の盆踊に変え、盆節季の借金取りにからませて張礼張孝の孝子譚を加味することによって、「胸こそ踊れ此の盆前」の一篇は成立する。あとは、「不孝の輩、眼前に其罪を顕はす」という序文の趣旨を貫くこと

だ。

兄嫁の夫長八も、小さんの婿も、家業首尾よく大廻しの航海から帰って来た。

娘と姪の善悪を語れば、長八胸にすへかね、此家を追出し、埒には外よりよろしき人の娘を子にもらひて、はじめのごとく夫婦となし、なをかはずして、生の松、千代もと、契りをこめける。

『本朝二十不孝』である以上、こうした結末に至ることはむしろ当然である。『本朝二十不孝』を相手に近代の短篇小説観を振り回してみても意味はない。「二十不孝に就いて知りたいならば、二十不孝そのものを精読して、それに依つて己れの見解を立つるべきである」(『西鶴一家言』)と私も思う。